

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

【38年戦争】の4区分	戦いの詳細
① 第一期 宝亀5年（774年）から宝亀9年（778年）	この時期は主に局地戦が行われた。 エミシの蜂起は日本海側にも及び、出羽国のエミシも反逆した。 朝廷の協力者だった同じエミシの伊治皆麻呂（これはりのあざまろ）らの協力で反乱は一旦収束した
② 第二期 宝亀11年（780年）から天応元年（781年）	第一期では朝廷側の協力者だった伊治皆麻呂による反乱。 皆麻呂は伊治城（これはりじょう）において朝廷高官を殺害、多賀城を襲撃し略奪放火をした
③ 第三期 延暦8年（789年）から延暦22年（803年）	
イ)延暦8年（789年） 大規模なエミシ征伐が開始された。 （粟伏の戦い）	イ)延暦8年（789年）には、大規模なエミシ征伐が開始された。 朝廷軍はいまの岩手県の大川で軍を留め進軍せずにいたが、桓武天皇から叱責を受け、さらに北の胆沢に向けて進軍したが、アテルイ率いるエミシ軍により多数の損害を出し敗走し遠征は失敗に終わった（粟伏の戦い）
ロ)延暦13年（794年）再度、エミシ征伐	ロ)延暦13年（794年）には、再度、エミシ征伐が行われた
ハ)延暦20年（801年） 坂上田村麻呂が征夷大將軍として遠征	ハ)延暦20年（801年）には、あの有名な坂上田村麻呂が征夷大將軍として遠征し、エミシを討伐した。現在の岩手県南部を制圧した。そのときは、アテルイとモレが五百余人を率いて降伏した。田村麻呂が朝廷に助命するようお願いしたが、朝廷の幹部たちが反対しアテルイとモレは今の大阪の枚方で処刑された。そこで東北の大勢は決した。
ニ)さらに延暦22年（803年）には朝廷軍が志波城を築城して、大勢は固まった。	ニ)さらに延暦22年（803年）には朝廷軍が志波城を築城して、大勢は固まった。この時期の戦いは実に14年間続いた。
④ 第四期 弘仁2年（811年）まで 38年戦争は終了	弘仁2年（811年）の小規模なエミシ征伐で38年戦争は終了する

【38 年戦争の詳細】

埋もれた古代史発掘シリーズ 第1・2弾 2本同日上映

奪われた古代鉄王国（第2弾）

鬼がつくった日本刀（第1弾）



『奪われた古代鉄王国』…列島初の製鉄は、出雲でも九州でも吉備でもない。それは東北だった！だからこそ、朝鮮半島からの鉄輸入ルート絶たれた大和朝廷により、古代東北は侵略されたのだ。大胆に、かつ最新の考古学的発掘成果に基づき構築された、古代製鉄の定説に挑む新説の映像化。

『鬼がつくった日本刀』…日本刀のルーツは古代東北にあり！日本刀の定説をくつがえす歴史ドキュメンタリー映像。古代の奥州刀鍛冶は強制移住を強いられ全国に送られ、そこで作刀した。そうして日本刀は全国で作られた。彼らは「鬼」とさげすまれたが、数々の名刀をつくり上げていったのだ。

【上映スケジュール】

東大和市民会館ハミングホール「小ホール」
(〒207-0013 東京都東和市内向原6-1) 西武拝島線「東大和市駅」より徒歩7分
2020年11月7日(土) 開場18:30 上映開始18:50 終了21:00 (150名定員)
三鷹産業プラザ 7F 701会議室
(〒181-0013 東京都三鷹市下連雀3-38-4) JR三鷹駅より徒歩7分
2020年11月28日(土) 開場13:30 上映開始14:00 終了16:20 (定員70名)
上映時間: 約2時間 途中休憩あり 入場料: 1000円(税込) 全席自由席 先着順

DVD好評販売中 問合せ先: 株式会社遊無有 mail : y.s.yumuyu@ozzio.jp

企画・制作: 株式会社遊無有 制作指揮・プロデュース・監督: 砂越豊

来月開催、埋もれた古代史発掘映像
二本立て上映会のお知らせ

加えて、前記の問いにひとつの答えを提示した。そしてコロナ禍の渦中の七月に撮影を強行した。もちろん、コロナ禍対策も十分に施しての撮影であったことは言うまでもない。何とか出来上がって、今月初めに一回目の上映を終えたところである。

映像のタイトルにもあるように、この戦争の動機は、大和朝廷による古代東北の鉄資源の奪取である。当時、大和朝廷は、鉄資源調達に大変苦労していた。

そのため全国に有力な鉄資源を求めて探索していた。そして古代東北にそれを発見したのだ。その鉄資源を奪取すれば、当時の朝廷の大きな課題はすべて解決すると考えた。すなわち、需要が急拡大していた鉄が朝鮮半島から輸入できなくなっていて、国内で鉄を生産しなければならぬが、そのための材料も技術も技術者も、何もかもが不足していて、財政もひっ迫していたのだ。古代東北の鉄資源を、い

かなる方法を用いても奪取しなければならなかった。当初は、朝廷の力をもって東北を攻めれば、そんなにむずかしいことではないと踏んだのであろう。しかしながら、戦争は長引いた。まさか三十八年間も戦い続けるとは考えもしなかったであろう。

「三十八年戦争と東北のその後の千二百年」

なぜこの戦争を取り上げたかといえば、その戦争が、その後の東北の運命を決め

たといっても過言ではないからである。そして、その戦争がどういうものであったかを振り返ることが、東北の再興を考える上で避けて通ることのできないことと思うからである。

まちがいなく、そこから、あまりにも長すぎる東北の衰退が始まったのだ。そして今も続いている。まず、人が奪われた。資源も奪われた。自由も、プライドも奪われたのだ。根

「三十八年戦争」で奪われたもの

当時の東北は、製鉄では列島の最先端を走っていて、製鉄技術も技術者も職人たちもたくさんいた。その製鉄手法は、朝鮮半島南部伝来の手法とはまったく異なるものであり、大陸の騎馬民族の優秀な製鉄技術の影響を強く受けた手法だった。そしてその手法を用いた製鉄拠点が、古代東北にあまねく存在し、古代の製鉄

コンピナートともいえる産業群を形成していたのだ。それが、「三十八年戦争」で奪われたのだ。

「三十八年戦争を起点にした東北再興とは」

東北再興を本気で目指そうとするならば、「三十八年戦争」で失ったものを取り返せばよいと考える。「三十八年戦争」では、人が奪われ、資源も奪われたのだが、それを取り返せばよいのである。

かつてのように物理的な戦争ではなく、平和的な戦略でもって取り返すのだ。人も、他地域にない移住政策という手法で。資源活用は、東北の素材に高付加価値をつけて生産することは当然として、他地域の素材にも高付加価値をつけて生産する産業を立ち上げて取り返す。

超長期の衰退で弱体化した経済で失われた自由は、逆に経済力増強で取り返す。結果として、プライドも取り返せるのではないか。

今後の東北を考えるのに、千二百年前の「三十八年戦争」を契機にするというのはあまりにも突飛すぎるとの批判が聞こえてきそうであるが、筆者は本気でこの

三十八年戦争を常に思い起こすことが東北に必要なのではないかと考えるのだ。



モレ想像図



第75回

水産業再興のための
料理レシピ紹介

【真タラのゴマフ ライ】



郷土料理愛好家
松本由美子氏

—材料(2 人分)— タラ 1 切れ、小麦粉 適宜、玉子 適量、パン粉・黒ゴマ・塩・各少々、揚げ油、キャベツ 35g

—料理方法— (① タラに塩をふっておく。② パン粉と黒ゴマを混ぜる。③ タラに小麦粉を振り、玉子を通し、パン粉(黒ゴマ入り)の手順でタラにパン粉をまぶす。④ 油で火が通るように、じっくり、火加減をみながら揚げる。⑤ 野菜と盛り合わせる。

前号に続き、新鮮な冬のタラが美味しいのでフライにしました。

(松本談)

コロナ陽性者増加で再び怪しくなってきました？！ みんなと
再会できるのはさらに先延ばしになる??

東北地酒、いろんな銘柄が目につかぶ、呑みたい！

【依然として第 43 回三陸酒海鮮会代替日程未定のまま】

3 月 14 日開催のはずだった第 43 回目の三陸酒海鮮会からすでに 8 か月も経ちましたが、依然として代替日程が未定のまま推移しております。美味しい東北地酒への恋しさが狂おしいほどに募っております。それまでは以前の写真画像のみで何とか耐えてください再びお会いできる日を楽しみに！忘年会までには再開できると思っておりましたが、再び怪しくなっておりまいた・・・

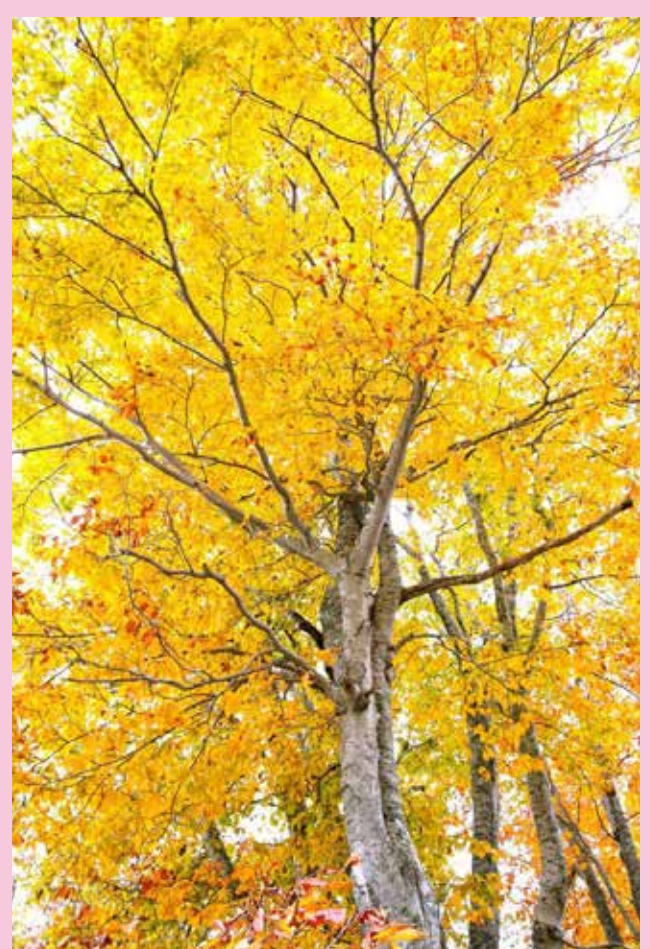
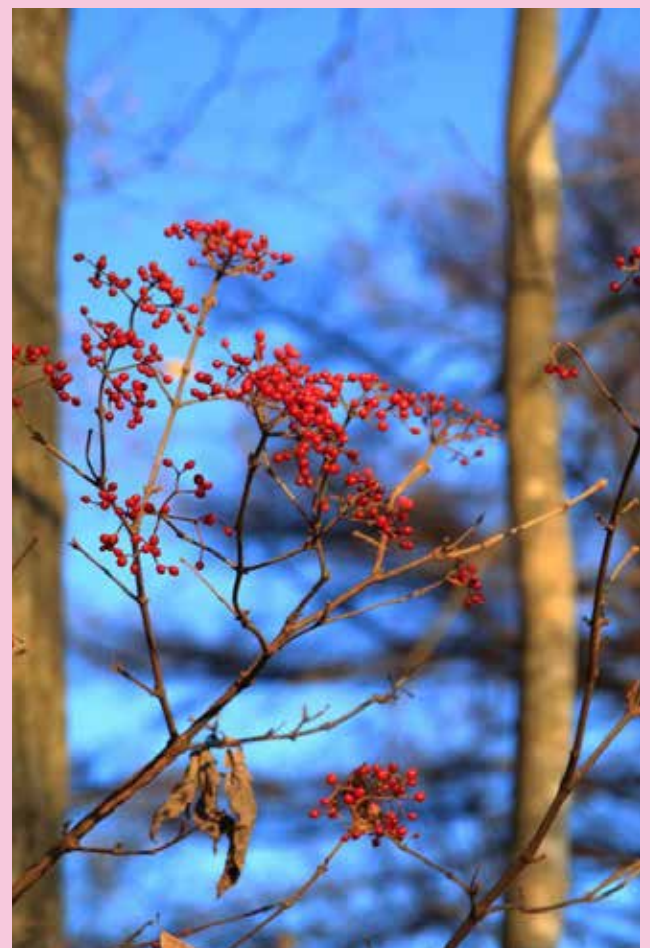
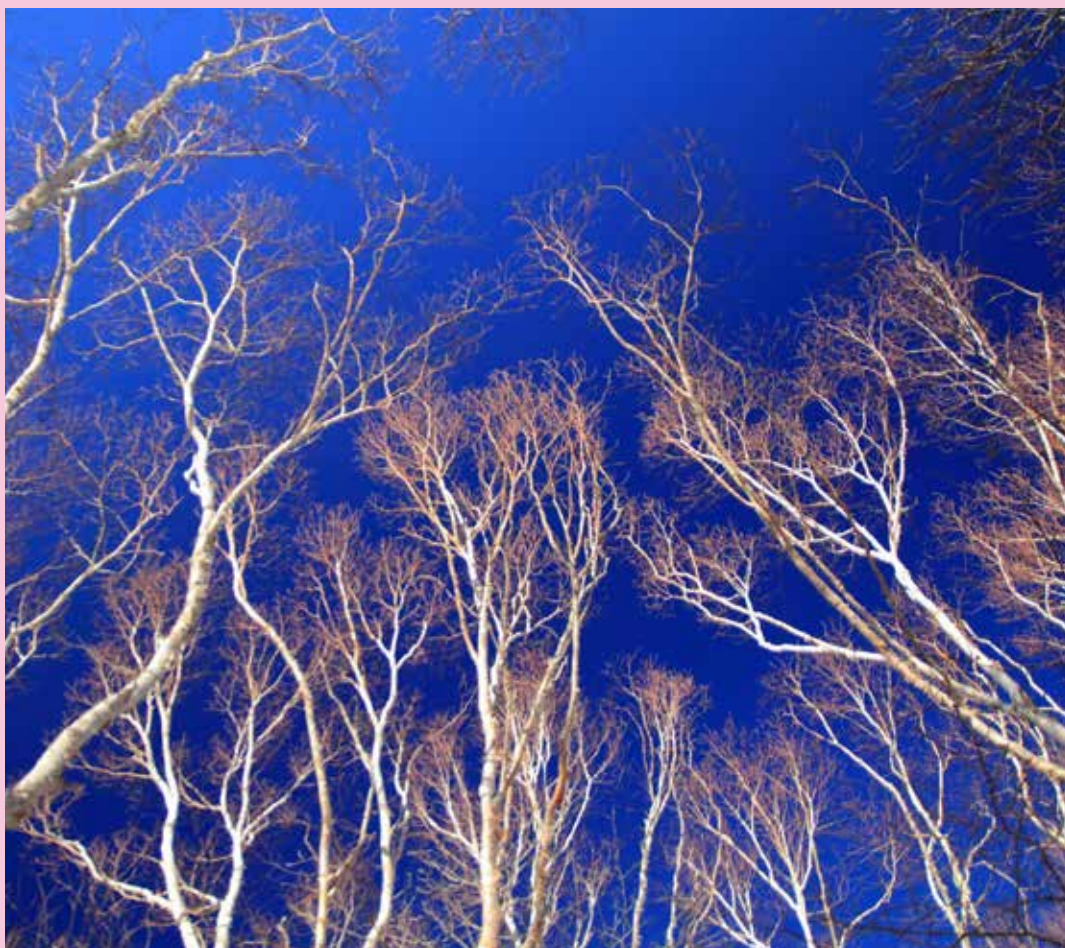




写真でお伝えする 東北の風景

新型コロナ禍
自粛症候群
「対応薬⑥」

写真撮影
尾崎匠



「大阪都構想」での議論をヒト・ゴトと思わずに

否決された「大阪都構想」

大阪市を四つの特別区に分割する「大阪都構想」が去る十一月一日に行われた住民投票の結果、反対多数で否決された。今回の住民投票は五年前の二〇一五年五月

会の決議に行き着く。ここから大阪府と大阪市における行政のあるべき姿を巡る議論は今に至るまで何度も繰り返されてきた。

法制度の整備により実現に道

今回の大阪都構想が現実味を帯びた政策としてクロースアップされたのは法制度が整ったことも大きい。二〇一二年八月に「大都市地域における特別区の設置に関する法律（大都市地域特別区設置法）」が超党派の議員立法として提出・可決された。この法律によって、これまで地方自治法で東京都のみに限定されていた特別区の設置が、道府県の区域内においても設置できるようになった。

同法の第一条にはその目的がこう記されている。「この法律は、道府県の区域内において関係市町村を廃止し、特別区を設けるための手続並びに特別区と道府県の事務の分担並びに税源の配分及び財政の調整に関する意見の申出に係る措置について定めることにより、地域の実情に応じた大都市制度の特例を設けることを目的とする」。すなわち、その目的は「地域の実情に応じた大都市制度の特例を設けること」で、まさに大阪都構想の実現には欠かせないものだったわけである。

ただし、全国のすべての都府県が自由に特別区を設置できるわけではなく、そこにはかなり高いハードルが設けられている。第二条にその規定が記されているが、第一条にある「関係市町村」とは、人口「三百万以上の政令指定都市、または一つの政令指定都市とその政令指定都市に隣接する同一道府県の区域内の一つ以上の市町村と、その総人口が二百万以上のものでなくてはならない。

大阪市は人口二七四・〇万人であるので単独でこの要件を満たすが、日本全国で他に同様の要件を満たす都市は、横浜市（人口三七四・九万人）と名古屋（同二三三・八万人）があるだけである。もう一つの隣接市町村との合計で二〇〇万人を超える都市としては、札幌市、さいたま市、千葉市、川崎市、京都市、堺市、神戸市がある。仙台市は残念ながら隣接市町村を足し合わせても二〇〇万人には到底達しない（同法では認められていないが「隣接市町村」として山形県内

執筆者紹介

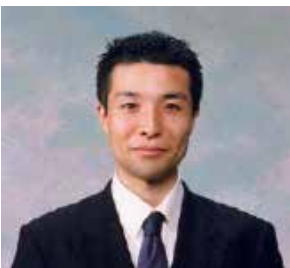
大友浩平

（おおともこうへい）

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

<http://blog.livedoor.jp/angma5/>



Face book
<https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo>

務の分担並びに税源の配分及び財政の調整に関する意見の申出に係る措置について定めることにより、地域の実情に応じた大都市制度の特例を設けることを目的とする」。すなわち、その目的は「地域の実情に応じた大都市制度の特例を設けること」で、まさに大阪都構想の実現には欠かせないものだったわけである。

ただし、全国のすべての都府県が自由に特別区を設置できるわけではなく、そこにはかなり高いハードルが設けられている。第二条にその規定が記されているが、第一条にある「関係市町村」とは、人口「三百万以上の政令指定都市、または一つの政令指定都市とその政令指定都市に隣接する同一道府県の区域内の一つ以上の市町村と、その総人口が二百万以上のものでなくてはならない。

大阪市は人口二七四・〇万人であるので単独でこの要件を満たすが、日本全国で他に同様の要件を満たす都市は、横浜市（人口三七四・九万人）と名古屋（同二三三・八万人）があるだけである。もう一つの隣接市町村との合計で二〇〇万人を超える都市としては、札幌市、さいたま市、千葉市、川崎市、京都市、堺市、神戸市がある。仙台市は残念ながら隣接市町村を足し合わせても二〇〇万人には到底達しない（同法では認められていないが「隣接市町村」として山形県内

の三市を加えたとしてもようやく一五〇万を超えるくらいである）ので、対象外である。逆に、千葉市や堺市などは仙台市よりも単独での人口は少ないが、隣接自治体の人口が多いために要件を満たしている。

虚実入り乱れた議論

大阪都構想の反対派の主張には、そうであるかどうか分からないことをあえて引つ張り出して住民に不安や不満を抱かせて都構想への反対を引き出すことが狙いだったと思われるような記載が数多く見られる。自由民主党・市民クラブ大阪市会議員団が作成した「新今さら聞けない大阪都構想」には、『都構想』は、借金のない大阪市の税収を、借金の多い大阪府に吸い上げる仕組み、『特別区』は水道や消防などの権限がなく『一般市』以下、「大阪市が独自の財源で行っている『敬老パス』や『こども医療費助成』などは都構想で特別区になると、財政悪化に伴って、特別区長が『止める判断』をする可能性」、「都構想になると、『特別区』の住民は、二重に税金を負担する可能性」などの文言が並ぶ。これらが事実なら、大阪都構想の推進派が参考にした東京特別区はものすごい劣悪な地方自治が行われていることになる。

しかし一方で、推進派の主張、例えば大阪維新の会が作成した「なんで！？都

構想が必要なん？」も、都構想のメリットのみを強調しすぎ、メリットとデメリットを比較して明らかにメリットが上回るという角度からの説明は必ずしも十分でなかったように見える。もちろん、実際にやってみないと分からないという側面も少なからずはあったのだと思う。その未確定、不透明な部分も含めて、やってみる方に踏み出すか、現状に踏みとどまるかという選択が今回の住民投票で、僅差ながら大阪市民は現状維持を選択した人が過半数ということだったのだろう。

なぜ反対派が上回ったのかを、塩野七生氏の大長編「ローマ人の物語」を引いて解説する人もいた。ユリアヌス帝の改革とその挫折である。ユリアヌス帝は既得権者に対する優遇政策を廃止してローマ再建を目指す、志半ばにして挫折、最後はペルシア遠征中に戦死する。ユリアヌス帝の改革が挫折した理由として作者の塩野七生氏は、「改革がむずかしいのは、既得権層はそれをやられては損になることがすぐわかるので激しく抵抗するが、改革で利益を得るはずの非既得権層も、何分新しいこととて何がどう得るのがわからず、今のところは支持しないか、様子を見るか、支持したとしても生ぬるい支持しか与えないからである」と分析しているそうである。ひょっとすると、今回の大阪都

構想も同様の構図が見られたのかもしれない。

地方自治を巡る議論を前へ

私は大阪とは縁もゆかりもないが、この大阪都構想の行方には関心を持っていた。反対した人の中には、「新型コロナウイルスで大変なこの時期にやることではない」という意見もあったが、この先の自分たちの地域をどうするのかというのは極めて重要な選択である。このままではよくないという問題意識があつて出てきた構想であるし、それはこの先の自分たちの地域をどう作っていくかにも直結することであるので、後回しにすべき問題ではなかったと思う。

実際に県と政令指定都市とを一緒に再編するというアイデアは大阪だけではなく、新潟や愛知や静岡でも出ている。それだけ、今回大きく取り上げられた道府県と政令指定都市との間の「二重行政」という問題が、各地で課題となつているということだろう。

地方自治を取り巻く課題はそれだけではない。国と都道府県との関係、いわゆる「三割自治」の問題なども手つかずのままである。今回の大阪都構想が弾みとなつて、こうした地方自治を巡る議論も再び動き出すのではないかという期待を持つてその推移を見ていたのである。

残念ながら現状維持となつたことで、議論の再始動の取っ掛かりはなくなった

感じたが、だからと言って、これが、このままの体制がすべて是認されたことを示しているわけではない。少

子高齢化と人口減少が進む中で、どのような体制が望ましいのか。二〇五〇年には日本の人口は一億人を大きく割り込んで九五一五万人となり、高齢化率は四〇パーセント近くに達すると予測されている。その頃までには既に維持が困難な自治体が出ていくかもしれない。課題解決を先送りしている時間はないのである。

東北が取るべき道

東北に翻つて考えれば、先に仙台市は特別区設置の要件を満たさないと書いたが、仮に仙台市が特別区設置の要件を満たしたとしても、それを目指すことが仙台市にとって必要であるとは思わない。二重行政の問題の解決は必要だが、特別区設置によって仮に仙台市が東京二三区のようになり、ヒト・モノ・カネがさらに仙台に集まるような体制になるのだとしたら、それは全く望ましい姿に反するように思える。仙台市が東北の中で果たすべき役割は、仙台市に集まってくるヒト・モノ・カネを再び東北各地に配分することである。その循環を東北エリア内に確立することが、今の東北にとって最も必要なことである。東京の抱える「一極集中」という課題はそこである。日本全国から集まる

ヒト・モノ・カネが東京の力の源泉だが、それは同時に地方衰退の原因でもある。

仮に東北六県がこの先道州制を敷いて、「異域同舟」ならぬ「奥羽同州」となるとしても、決して州都あるいは州庁所在地を仙台市としてはいけない。それは、東京の一極集中の縮小コピーを東北に作り出すだけである。そうではなく、なるべくコンパクトな州都あるいは州庁所在地を東北の真ん中に置いて、既存の都市圏が複数の拠点としてゆるやかにかつ有機的に連携するような仕組みをつくるべきである。国土交通省の定義では、東北には青森、弘前、八戸、盛岡、仙台、石巻、秋田、山形、鶴岡、酒田、福島、会津若松、郡山の二三の都市圏があるとされている。都市圏にはカウントされていないが、他にも地域の拠点となつている都市が複数ある。これらの相互の連携や役割分担、協働を増やし、域内交流を活発化させて、ヒト・モノ・カネが域内で循環する仕組みを作ることが必要である。

まずは個人レベルから

しかし、そうは言っても、現状では東北全体で議論が進んでいるわけではない。東北は地域全体に共通の課題を持っている。六県と各都市圏がもっと交流する機会が増えていけばよいのだが、そうした仕組みができない限りは一足飛びに進みそうにはない。

大阪都構想でも「民間にできることは民間へ」ということが推進派によって強調されていたが、行政ベ

スで進まないなら、ここは民間の出番である。もっと言えば、個人個人の出番である。まずは我々東北に住む人が同じ東北の他の地域にお互いに行つてみることから始めてはどうだろうか。幸いにも、東北エリア内を巡る高速交通網は着実に整備されている。新幹線は六県全てにつながり、高速道路も「復興道路」と位置づけられる「三陸沿岸道路」、「宮古盛岡横断道路」、「相馬福島道路」は震災から一〇年を迎える来年三月までにほぼ開通予定である。ひと頃よりも東北エリア内の移動に掛かる時間が大幅に短縮されている。これを利用しない手はない。

折しも停滞している日本経済の再始動を図るために立ち上げられた「GOTOトラベル」事業が展開中で、低コストで旅ができる。お互いを知らなければ交流はできないし、ましてや連携はるか先である。交流はそこに行つて見ることから始まる。

東北には素晴らしい自然、素晴らしい食、素晴らしい文化があり、素晴らしい人がいる。にもかかわらず、同じ東北同士であってもお互いに知らないことはまだまだ多い。まずは知らないところに出掛けていくことから東北の活性化を図つてみてはどうだろうか。



初冬のアジサイ



ツルウメモドキ

米国やヨーロッパは別として、国内ではもうそろそろコロナ禍も終息するかと、ほんの少しほっとしかけているところに、再びコロナ陽性者が全国的に増加というニュースにとてもがっかりしている。

今年二月に騒ぎ始めて、すでに九か月である。ここまでも「期限のないゆるい軟禁状態」のように家に閉じ込められていたのが、さらに期限なき軟禁延長を覚悟しなければならぬ。もういい加減にしてほしいと

叫びたくなる。
季節の変化といえば、狭い庭に伸び放題の雑草刈り取りと枝木の剪定くらい。
遠野の自然がうらやましいかぎりである。

シリーズ 遠野の 自然

「遠野の 立冬」

遠野 1000 景
より



紅葉ライトアップ



かまし



雨上がりの朝



キャタピー



紅葉



寺沢高原からの早池峰山

東北人は「東北の財産」を どこまで誇れるかという事

今年、私はある私用で青森県八戸市を訪れた。それはとある一冊の本を手にする、という目的で、その内容は現代の青森を版画の盛んな土壌とするきつかけを作った銅版画家・今純三考現学で知られる今和次郎の弟）の、実の娘が著した彼の伝記なのであった。

約四十年前の出版という既に古い書籍であり、仙台中の書店はおろか、仙台市内、宮城県内、ついでに隣県山形、岩手の主要図書館の蔵書をネット上で検索するも全く見当たらず、結果、確実にその本を所蔵するのが少なくとも地元青森市、弘前市そして八戸市の図書館内、加えて東京の国会図



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始め東北好きである。

書館であるという事が判明しかし私に探索できるのはそこまでであった。

この事は私にある複雑な思いを抱かせた。日頃から「東北は一つである」という感覚あるいは願望のようなものを持っていて、東北の素晴らしい風土や自然、優れた人物、そして勿論その反面に誰か東北人が起こした犯罪やどこか東北内で起きた災害といった負の側面すらも、狭い一地域の事ではなく、東北全体の問題と捉えてしまう私にとつて東北の一地域に生き、郷土に確実な足跡を残す人物が少なくとも東北全域に知られる体制になっていなくて良いのか・・・と（勿論取材旅行というのは土地勘も得られ、楽しいものだが）。

＊

東北人として知っていていい、乃至むしろ知っておくべきと思われる東北他県に関する事柄という、私が真つ先に思い出すのはかなり以前に出版された東北関連の一冊、『東北再考』（創童舎・二〇〇三年 現在『東北ルネサンス』と改題し小学館から文庫化）の一節である。東北電力の企画による、民俗学者・赤坂憲雄氏と七人の識者との、東北・新潟七県の会場で行われた対談の採録集で、宮城県では小説家の高橋克彦

氏、福島県では歴史学者の故・高橋富雄氏が登壇した。高橋克彦氏は青森県の三内丸山遺跡が発掘された当時、東北中の人々が青森県の問題と捉えていた現状が残念だった、と語っている。

「縄文時代というのは東北全体の問題だったわけで（中略）ひとつの県ごとの意識というのが悲しかった」

一方、高橋富雄氏は中世平泉の実像を解説する中で、「平泉の歴史というものを福島県の方々は『何だ、それは岩手県の歴史だ』などとお考え頂かない事をお願いします。（中略）福島県地域というのは、平泉政権における最大の片腕を為していました。」

と力説している。両氏の言葉からは東北を一つの単位として考える重要性、もしくはそう考えなければ本質を見失い兼ねない歴史遺産が存在し、それらが不当に過小評価され埋もれさせられる可能性への危機感が伝わってくる。

確かに、三内丸山遺跡は長く後進地帯とされてきた東北という概念自体を覆した存在であり、平泉は、その建設と政治思想そのものが東北全体を視野に入れた都市であったことから、県単位で捉えれば狭すぎるし、日本全体で捉えれば広すぎて複雑な研究措置が執られる怖れがある（つまり、高橋氏のような東北側の視点での平泉研究が為されなかった可能性がある）。

しかし、ならば美術家・今純三の後輩でもある棟方志功、文学者・宮澤賢治や藤沢周平などの人物はどうであろうか？彼らが押しも押されぬ東北を代表する偉人であるという事に異論のある者は少ないだろうが、その前にまずすべからずそれぞれ青森・岩手・山形の誇りであるに違いない。彼らの場合、東北全体に英雄視される必要は実はなく、その視点はあくまで副産物的なものであつて、本来は県がその偉業を発見・認知し顕彰していけばその事績に応えた事になるのではないか、と思えなくもない。

こう考えると、「東北の財産」たる人物・史跡含めた歴史遺産には、まず地域単位・県単位で捉え、研究・保存していった方が望ましいケースもあると思えるが、一方で東北全体の視点で捉えた方が望ましいと考えられるのは、前述の縄文時代や平泉の関連の他、古代蝦夷や戊辰・東北戦争の関連などだろうか。では例えば宮城県石巻市のサン・ファン・パウテイスタ号の

場合はどうかと考えてみる。伊達政宗の時代の記録そのままの完全復元として大変貴重な船体であるが、県は老朽化を理由に来年以降の解体を決定し、一方で市民団体による保存運動も起きている。歴史遺産の破壊というのは、その重要性があり、その要因にはやはり

り県単位の視野の下で過小評価されている実態が浮き彫りになっているとは言えないだろうか。

反面、即座に「東北全体の財産」と表明して良いものか躊躇するケースもある。秋田県は公立大学や美術大学の新設のみならず小学校からの教育面での独特な取り組みと成果で知られ、また漫画を活用した『地方は活性化するか否か』など地方都市や少子高齢化関連の高い意識を持った活動も何かと話題になる。あたかも東北他県がやり出すのを待つてなどない、そもそも他県の動きなど興味もないというかのような独自のアクションが魅力である。

その秋田県で最近また驚かされる動きがあつた。一般的にも認知度の高い『キングダム』や『鬼滅の刃』などの作品、そのエンドロールに名前が記されるという、秋田発のアニメーション制作会社の発足である。その名も『つむぎ秋田アニメLab』。近年の国内

メ作品はその本数のみならず質的にも向上著しいが、首都圏での慢性的なアニメーター不足の為、人材発掘を視野に埼玉から秋田へ拠点を移してきたという。

何故秋田なのか？その理由は驚くことに、秋田公立美術大学の存在らしいのだ。「アートの基礎を学んだ優秀な人材を確保できるのが

秋田の魅力」

と櫻井司社長は語る（秋田魁新報の記事より）。埼玉・秋田二拠点で数十人体制だが、将来的に秋田だけで三百人規模に拡大するのが目標。巷ではフリーランスが常態化しているアニメーターの正規採用という地方ならではの堅実さもアピールしており、地方の人材を中央に引き抜くのではなく、地方に芸術のメッカを築こうという動きがまさに始まっている事になる（以前の拙稿『仙台市立芸術大学の事』で私が地方芸術大学の重要性を綴った通りだ）。

まさにこうした秋田県における動きは現代の東北にとつて誇るべき、明るいニュースのはずなのだが、秋田の人々にしてみれば、まずは自分たちの功績であるのにいきなり「東北の財産」などと多県民から囁かれては逆に反感を買ひ兼ねないかも知れない。秋田の動きは周囲の県から見るとあまりに独自であり、先鋭的にすら見えるので余計そう感じるのかも知れないが、「東北全体の問題」「東北は一つ」というのは、東北という確実な国家や民族、行政の単位が存在していない現状では極めて曖昧な概念に過ぎないという現実が一面にあると言えようか。

しかし、その一方で、つい最近ある一冊のユニークな東北関連の本が書店の棚に登場し、注目を集めている。

る。その本、題して『大学で学ぶ東北の歴史』。出版元は『大学で学ぶ日本の歴史』と同じ吉川弘文館で、その東北版として作られたようだが、売り文句は「日本の歴史を『東北』から見た」とあり、まさに今までにない地方視点・東北視点の歴史教科書を標榜するものである。編纂を担ったのは仙台の東北学院大学であるが、本書が東北における知の殿堂とも称される旧帝大・東北大学ではなく、私学である東北学院から生まれた事も、何やら象徴的だ。

「明確に存在しない区分」である東北を看板に国立大学が動く事は難しいのかも知れないし、この難しいテーマにおいてはどこまでも難しい本にしてしまうかも知れない。東北という不明確な、それでも確実に存在する概念を、思い切つて、しかもわかりやすく形にしてみようとする自由な精神は、やはり地元の私立大学ならではの強みのような気がするのである。

帯にて自ら東北史の「入門書」と銘打つ通り、出だしの人類誕生から縄文時代にかけて記述は意外なほど基本的で平易である。古墳時代（縄文文化の南下）アイヌ語地名の要因）などにも触れず、平泉関連も極めて常識的に綴っているのだが、本書の本領は江戸時代からで、東北諸藩の蝦夷地警護やアイヌ蜂起の際の



東北学院大学歴史学科編・大学で学ぶ東北の歴史

諸藩の動きなどかなり詳細に書かれ、更には満州事変が東北出身の軍人によつて起こされ、東北からの移民がどのような苦闘を強いられたか、そして現代史に至つては福島県に原発が乱立していった仕組みと経緯が各々十ページにも渡り記されている。特に異色なのが岩手の伝統行事「チャグチャグ馬コ」の解説記事で、これが決して古い行事ではなく、馬産の斜陽、軍馬関連の行事など近代の背景の中から誕生したものであるという史実が七ページに渡り語られる点である。新しい行事だからといって価値が減退する訳でなく、民俗や伝統というものは常に現在進行形で変化していくもので、それに気づく事でむしろ東北という風土の本質を捉えていかなければならない、と主張しているのだ。教科書としてはかなり自由奔放、熱意のままに編纂したという印象が強いが、東北は一つ、という事が実感できる名著と私は感じた。

＊

東北は大和朝廷やその後の源氏による侵攻と介入に

よつて、何百年にも渡つて分断され、現在も六県に割かれたままなのだと思ってきた。しかし東北がそれ以前は一つだったかという、実際は今の六県以上に分割された部族社会的な意識がもつと古代から存在してきた可能性も考えられる。おそらく全列島に等しく見られたであろうそのような民衆の姿の中で、各部族・地域譲れぬものを持ちながら、いつから東北は「同じ奥羽の仲間」という意識も併せ持つようになったのか。現代の秋田のように信念を持つて独自に動く地域に周囲が心を動かされた時、自らも動く事ではない、いざとなれば団結するような、「一つの東北」が形成されていた、とは想像できないだろうか。今後再びそのような地になれば、無名に近い郷土の芸術家も、破壊されようとする歴史遺物も共有財産として東北総出で守り抜き顕彰する―それも決してあり得ない未来ではあるまい、と思うのである。

東北六県は、魚を食べに行きたい都道府県の TOP5 には 1 県も入っていないって知ってましたか？

マルハニチロが2020年10月7日に発表したデータ。
なんと東北6県はTOP5には1県も入っていない！

	都道府県	%
1位	北海道	51.0
2位	石川県	4.1
3位	富山県	3.6
4位	静岡県	2.9
5位	東京都	2.4
6位	宮城県	2.1
	福岡県	2.1
8位	千葉県	1.6
9位	高知県	1.4
10位	青森県 / 福井県	各1.2

「魚食に関する調査 2020」に驚く

大手食品会社のマルハニチロが、「魚食に関する調査2020」を十月に実施し、魚料理グルメ旅行で行きたい都道府県のランキングを発表した。

同調査は、9月17日～18日に20歳～59歳の男女1000名に対しインターネット上で行なわれたもので、魚を食べる頻度や調理方法、好きな魚ランキングなども明らかにされているようだ。

調査では北海道が51.0%でダントツトップであ

ったが、それなりに理解できる。

しかし、水産加工分野はともかく、第一次産業としての漁業が盛んだと言われて来た東北六県が、トップ5に一県も入っておらず、わずかに宮城県が同率六位、青森県が同率十位に入るのみで、他の4県は十位内にもランキングされていないのである。

この結果にはとても驚いた。まさかという印象である。北海道を除けばドンダリの背比べ？

ランキングをよく見れば、51%の北海道が過半数以上

を占めており、二位の石川

県の4.1%を筆頭に、十位

の青森県・福井県の1.2%まではほぼ大差なく、ドンダリの背比べ状態と言える。

大差がないのならば、甘んじて受け入れるしかない。とあきらめる東北関係者もひよつとしたらいるかもしれない。

しかし、筆者としては、この結果をすんなりと受け入れるわけにはいかない。

他県人に自慢できる郷土の魚料理一覽

調査ではまた、都道府県別に、他県人に自慢できる

魚料理を聞いたところ、「サ

ケのちゃんちゃん焼き」

（北海道）、「マグロの刺し身」（青森県）、「はらこ飯」

（宮城県）、「アニコウ鍋」

（茨城県）、「なめろう」

（千葉県）、「寒ブリの刺し身」（富山県）、「ノドグロ

の刺し身」（石川県）、「ウ

ナギのひつまぶし」（愛知

県）、「伊勢エビの寿司」（三

重県）、「鮎寿司」（滋賀県）

「フグのてっちり」（大阪

府）、「ノドグロの煮付け」

（島根県）、「フグ刺し」（山

口県）、「オリーブハマチの

刺し身」（香川県）、「鯛め

し」（愛媛県）、「ごまサバ」

（福岡県）、「関サバの刺し

身」（大分県）、「グルクン

の唐揚げ」（沖縄県）とい

った魚料理が主なものとし

て挙げられているようだ。

宮城、青森を除く、東北

4県の自慢の魚料理は、「い

ちご煮」（岩手県）、「ハタ

ハタ鍋」（秋田県）、「タラ

のどんがら汁」（山形県）

「メヒカリの天ぷら」（福

島県）が挙げられている。

トップ3の食べたい魚料理

さらに、上位3の北海道、石川県、富山県の食べたい魚料理も自由回答形式で記載されている。

ダントツ一位の北海道ではよく耳にする、サケ、イクラ、ホッケ、ウニ、カニなどの魚料理が並ぶが、「マグロの刺身」は北海道かな？

石川県はノドグロのオンパレードで、他にブリがあるが、「イクラ丼」や「タイの刺身」はどうだろうか？

また、富山県のブリは分かるが、「サケのムニエル」はどうなんだろうか？

調査にケチをつけるつもりは毛頭ないが、魚の流通網が整備された日本では、郷土の魚料理の境界や特色は薄れているのだろうか。

筆者が食べたい東北の魚料理を挙げてもあり意味がないかもしれないが、太平洋側では、牡蠣、タコ、サンマ、サバ、サメ関連で

フカヒレ、モウカザメの刺

身、ホタテバター焼き、ウ

ニ、アワビ、キンメダイ、ホヤなど。

日本海側では、岩ガキ、

イカ、ギバサ、大和シジミ、

カレイなどであろうか。

このように東北には魚料理の素材が豊富である。

やはり東北は宣伝下手なのか？

それにしても残念な調査結果である。

東北6県はもつと上位ランクを取りに行つて欲しいものだ。

太平洋側の三陸沖は世界でも珍しいほどたくさん種類の魚が獲れる場所であり、寒流と暖流の魚種が入り混じる場所であり、魚は豊富であるはず。

その魚を食べに行きたいと思う人が少ないというのはがっかりである。

また、東北の日本海側もたくさん魚が獲れる場所。なのに、石川県と富山県に日本海の魚王国の座を奪われている。

PR不足なのか、他県人に来てほしくないのか

この結果を残念だと思ふのは、東北出身の筆者のひいき目だけのせいではないと思うのである。

◆魚料理を食べに行くグルメ旅行先で食べたい魚料理【自由回答形式】

※回答を抜粋して表示

対象：魚料理を食べに行くグルメ旅行先の都道府県として北海道・石川県・富山県のいずれかを挙げた人

■北海道で食べたい魚料理

石狩鍋(40代男性)／サケのちゃんちゃん焼き(50代女性)／イクラ丼(20代女性)／サケ・イクラ丼(30代男性)／マグロの刺し身(30代女性)／ホッケの塩焼き(20代男性)／ウニ丼(50代男性)／茹でガニ(50代女性)／ホッケの刺し身(30代女性) など

■石川県で食べたい魚料理

ノドグロの寿司(20代女性)／ノドグロの煮付け(40代男性)／イクラ丼(50代女性)／タイの刺し身(50代女性)／ノドグロの刺し身(20代女性)／ブリしゃぶ(40代男性) など

■富山県で食べたい魚料理

寒ブリの刺し身(50代男性)／ホタルイカの塩辛(50代男性)／鮎寿司(40代男性)／サケのムニエル(20代男性)／かぶら寿司(40代女性)／サシ(カジキマグロ)の刺し身(50代女性) など

筆者としても、むやみに東北観光熱を煽って、だれでも良いから、東北に観光客を増やせばいいとは思わない。

しかしながら、中途半端なPRは止めた方がいいと思う。やるならば徹底してやることだ。